試合後に健闘をたたえ合う武豊の柳田主将（右）と内海の永井主将（刈谷球場で）

同士一つでも上に

武豊の最後の打者となった柳田陽冶（ようや）主将（３年）の打球は遊ゴロ。内海の永井駿亮主将（３年）の所へと転がった。両校は春まで連合チームを組み、毎週末ともに汗を流した２人。互いに「手加減しないぞ」と言い合って臨んでいた。

柳田主将は、新入生の入学と同時に部員集めに奔走。１年生５人が集まり、今大会は何とか９人で試合にこぎつけた。単独チームでの出場を誰より喜んでいたはずだが、内海との対戦にはやはり複雑な思いもあった。

試合後、連合チームの指揮も執った内海の山下博史監督に「頑張ったな」と抱き寄せられると、思いがあふれて号泣。「やっぱりチームメート。内海には一つでも上に行ってほしい」と心から言えた。

読売新聞（R3.7.5）

朝日新聞　2021年（令和3年）7月5日（月

武豊	2	0	2	1	1	0	0	0	6
内海	3	2	2	0	0	0	2	0×	9

内海・永井駿亮主将（左）
武豊・柳田陽冶主将（右）

2021 夏

春まで「仲間」一番のライバル

3点リードの九回表2死一、二塁、内海の遊撃手、永井駿亮主将（3年）は自らに言い聞かせた。

「俺のところに飛んでこい」。武豊の4番・柳田陽冶主将（同）の打球は願った通りに自身の前へ。冷静に捕球して二塁封殺。仲間とグラブを合わせて勝利を喜んだ。

両校は部員不足で今春まで連合チームとして活動していた。永井主将は「ずっとやってきた仲間だからこそ絶対勝ちたかった」と話す。

初めて連合チームを組んだのは永井主将が1年生だった一昨年の秋。当初は互いに人見知りして同じ学校の選手たちと固まってばかり。「単独でやりたいというのが本音だった」。だが、野球の話をするうちに距離が縮まり、グループLINEで頻繁に連絡を取り合ったり休日に遊んだりするようになった。

昨夏の独自大会には単独で出場したが、昨秋から再びともに活動。連合チームとしての主将も兼任するようになると、自分から積極的に武豊の下級生に話しかけるなどチーム全体の様子を見るように心がけた。

両校の対戦が決まったのは6月中旬。抽選会を終え、一番のライバルである柳田主将に「俺たちが絶対勝つからな」とLINEを送ると「いや勝つのは俺たちだから」と返事があったという。

試合後、柳田主将は「これまで自分たちだけでは大会に出ることもできなかったので、内海のみんなにありがとうと言いたい。絶対に上まで行ってほしい」と声を振り絞った。

3安打、4打点と活躍した永井主将は「武豊のみんなのおかげで自分たちも成長できた。（武豊の）9人分の思いも背負って次も必ず勝ちたい」と前を向いた。

（仲川明里）

朝日新聞（R3.7.5）

中日新聞
2021年（令和3年）7月

内海、武豊 初戦で対決

今春まで合同チーム 内海に軍配

試合後に肘タッチで健闘をたたえ合う内海の永井主将㊧と武豊の柳田主将＝刈谷球場で

㊀刈

内　海

	内	武
海	3	2
豊	2	0
	0	2
	0	1
	2	1
	0	0
	0	0
	2	0
	0	0
	x	0
	9	6

（武）渡辺―柳田
（内）小薗―堂森

白球

「本気でぶつかって楽しかった」。今春まで合同チームだった内海、武豊が一回戦でぶつかった。激闘の末に敗れた武豊の柳田陽治（ようや）主将（三年）は「油断せず勝ち進んで」とエールを送り、内海の永井駿亮（しゅんすけ）主将（同）は「最後まで頑張る」と答えた。

両チームは一昨年夏から昨春と、昨夏から今春まで合同チームを組んだ。内海高近くの南知多町の砂浜で一緒に走り込みし、休日は食事に出掛けるほど仲が良くなった。

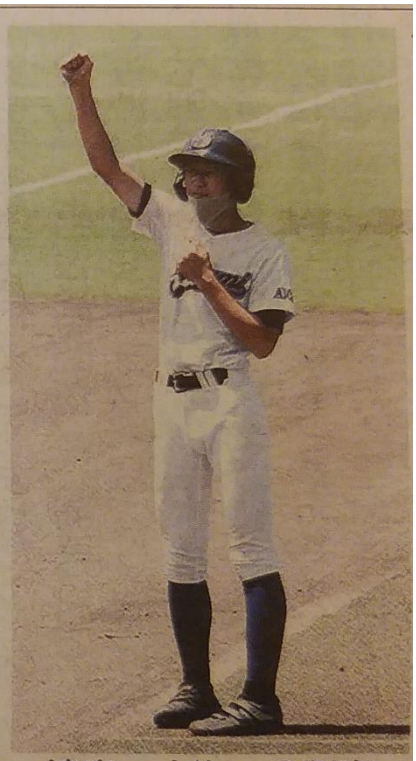
幼なじみ二人の再会の場にもなった。武豊の渡辺俊介選手（二年）と内海の小薗雄暉選手（同）は幼稚園から友人。小学生は同じ少年野球チームで競い合ったが、中学一年で小薗選手が転校。小薗選手は「再会したライバルとの練習は充実感があった」と振り返る。

内海の山下博史監督は「武豊の選手も大事な教え子。一番当たりたくない相手を引いた」と苦笑い。しかし柳田主将は「手加減しない」と永井主将にメッセージを送るなど、選手たちは意気込んでいた。言葉通り両校が一回から激しく点を取り合った。

試合後、たたえ合った両チーム。柳田主将は「一緒に練習して、最後まで諦めないことを学んだ。粘り強く戦って」と次戦を応援。永井主将は笑顔で肘タッチをし、思いを受け取った。

（籔下千晶）

中日新聞（R3.7.5）



津島ー内海　6回裏
内海2死二塁、前田の右中間三塁打でガッツポーズする小島＝岡崎市民球場で

声を出しチーム鼓舞

内海・小島選手

○…高校で野球を始めた内海の小島知也選手（二年）は唯一の控え選手として仲間を鼓舞した。

初戦に続き出番はなかったが、一塁コーチをこなし、守りではベンチから声を出し続けた。六回に1点を返した際は一塁コーチスボックスでガッツポーズ。無念のコールド負けに人一倍悔しそうな表情をみせた。

新チームでは「レギュラーを目指したいが、たとえどんな役割でもチームに貢献したい」と思いは変わらない。

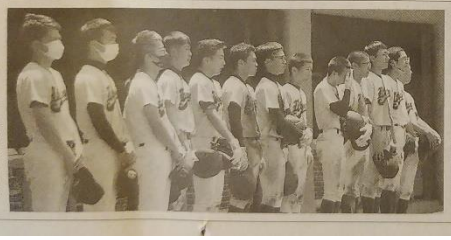
朝日新聞（R3.7.18）

総勢12人の内海 気持ち受け継ぐ

選手10人、マネジャー2人の総勢12人で挑んだ内海。コールド負けを喫したが、山下博史監督は「スコアは開いたが、負けていない部分もあった」と、部員たちをねぎらった。

遊撃手の永井駿亮主将（3年）は、コミュニケーションに心を配ってきた。「少人数だから、逆にいっぱい話ができる」。この日も、ピンチになるとマウンドに駆け寄り、小薗雄暉投手（2年）に「自分の所に打たせろ」「自信を持って投げろ」と励ました。高校野球のおかげで、人間として成長出来たという。

六回に適時三塁打を放ち、チーム唯一の得点をもたらした前田楓斗選手（1年）。左翼を守り、七回には安打性の当たりを好捕する活躍もあった。これで3年生4人が抜けるが「先輩たちの分まで頑張りたい」。9人に満たなくても、気持ちはしっかり受け継がれている。（深津慶造）



コールド負けに悔しそうな内海の選手たち＝岡崎市民

中日新聞（R3.7.18）